メデイシン　期待効果と松浦ケント

matsuura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メディシン　期待効果と松浦ケント

【Ｎコード】
Ｎ５６６３Ｙ

【作者名】
ｍａｔｓｕｕｒａ

【あらすじ】
ＭＨＫの名家の姉妹の確執。
母の死。
マダム・ストーンから調査を受けたケント。
ケントが、中国東北部へ調査に向かう。

２０１１．１１．０９　ノベルストへ投稿

1.

梅雨が終わって、私立探偵の松浦ケントは、久しぶりに奈良の実家に帰っていた。

実家は、唐招提寺から歩いて3分、垂仁天皇稜から1分ぐらいの距離の所にある。

彼の子供の頃は、庭に、蛍も飛んでいたが、もう見ることは出来ない。

ケントの実家での日課は、台所でテレビを見ながら母と話をしたり、母の話を聞くのが主だった。

ケントの母は、４５年間茶華道師範をしていた。

４５年間通ってくれたお茶のお弟子さんも、何人か居たようだ。

華道のほうは、毎年、高島屋で開催されていた大日本華道展に作品を出品し、新春の南都銀行本店のウインドウにも出品していた。

母も、今は、リタイアしている。

最近、母の足の裏に「魚の目」ができて、痛くて外出できない。

「足の裏の魚の目は、まだ痛いの」と、ケントは、母に訊いた。

「だいぶ、良くなったわ」

「でも、まだ長距離を歩くことが出来ないの」

「だから、運動不足にならないように気をつけているわ」

「ほんとうに、気をつけてくださいね」と、ケントはインターネットを見ながら、母と台所でこんな話のやりとりをしていた。

ケントは、インターネットで中国の薬局業界の記事を見つけた。

中国の薬局業界は、日本と比べると依然として生産性は低く、今後店舗の効率性や製品のラインナップ化を工夫検討する必要がある。

中国の薬品流通市場の改革は、他業種に比べてスピードが遅く、伝統的な薬局は経営スタイルを模索している。店舗数の急増に伴い、過剰出店の課題も出てきている。

「そう言えば、大連でも薬局の数は多かったなあ」と思った。
現在、大連では、薬局の出店規制が敷かれているようで、個人では、新しく薬局の店舗を出店できない。
海王星チェーンなどのチェーン系列店しか、新店舗を出店できないのだ。
「個人では、薬局も自由に出店できないのか」
「形態は異なるが、毛沢東主席の時代に逆戻りするのかなあ」と、そんなことを考えながら、ケントは、その記事を読んでいた。

2.

突然、ケントの携帯電話が鳴り出した。
電話の主は、マダム・ストーンだった。
彼女の姓は「石（シィ）」だが、ケントが「マダム・ストーン」とニックネームを付けた。
彼女は、ＭＨＫの人だ。
実家は、水稲栽培の農家だが、彼女の父は、ＭＨＫ木材業界では実力者として名前が知れていた。
ＭＨＫには、不思議と美人が多い。
美人の数は、大連など比ではない。
以前は、もっと美人が多かった。
しかし、今は、他地方へ美人が流出して、美人の数が減って来ている。
マダム・ストーンは、ＭＨＫ史上の美人の中でも三指に入るほどの美人だった。
色白で容姿端麗、ケントの子供の頃の日本人に近い考え方を持っていた。
しかし、そんな彼女も、決して幸せではなかった。
ＭＨＫは、飲酒の機会が多い場所だ。
海量（ハイリャン・しゅごう）も多い。
去年の暮、彼女の夫が、飲酒運転で交通事故を起こした。

その交通事故が原因で、夫婦仲が悪くなり、彼女は離婚した。
男の子は、彼女の夫の家で引き取って育てている。
子供は、兵役で，瀋陽の部隊に入隊した。
マダム・ストーンも４０歳を超えると、その美貌も衰え始めている。
「ＭＨＫの伝説の美人も、永遠ではないな」と、ケントは、改めて実感した。
中国の女性は、相対的に、３０歳～３５歳を越えると老ける速度が加速する。
彼女は、元来、美人だから、美人が美人の美貌を維持するのには、並大抵でない努力を払っているように見受ける。
ケントが、ＭＨＫという町を知ったのは、マダム・ストーンが、彼をＭＨＫへ連れて来てくれたのが切っ掛けだった。

3.

「今晩の列車で、ＭＨＫへ帰ります」
「ケントも、一緒に、ＭＨＫへ行かない」
父親の仕事の代理で、大連にやって来ていたマダム・ストーンから、突然、ケントに電話が掛かって来た。
「じゃ、同行させていただきます」と、彼女に言った。
大急ぎで、旅行の準備をしてケントは、待ち合わせの時間に大連駅裏の時計の下へ行った。
彼女と一緒に、午後７時２０分発「瀋陽」経由の「吉林西」行きの列車に乗る。
その列車は、翌朝、午前６時前にＭＨＫに着いた。
夏休みに入り、学生が移動するシーズンなので、列車の切符の入手が困難になっている。
マダム・ストーンが、手配してくれていた列車の席は「硬座」（イン・ズウオ）だった。
一応指定席だが、自由席のようで、寝台席ではなかった。

座席は、木製の座席だった。木製の座席は硬く、ケントのお尻に容赦なく食い込んでくる。
その夜、ケントは、「硬座」（イン・ズウオ）という座席の名前の由来を思い知らされた。
その列車は、瀋陽を過ぎたところで、故障して修理のために２５分ほど止った。
列車が止ると、車内が、急に蒸し暑くなった。
列車は満員で、ほとんどの乗客が裸足にサンダル履き、半袖、半ズボン、上半身裸になる男の人も居た。
ひどい客になると、グループでトランプをして大声で、一喜一憂し、酒を飲み、煙草も吸うのである。
ケントは、長年、アジアで生活しているので、このような客の行為には免疫性が有る。
しかし、ケントは、臭(にお)いに対しては敏感で免疫性が無い。
この国の人たちは、元々、あまり入浴する習慣が無いので、列車内は、彼らの体臭が充満している。
彼らの体臭が充満している列車の中に、ケントは、１１時間ほど監禁状態になった。
ケントが列車を降りる時には、この国の体臭に圧倒され、体臭酔いを起こして酸欠状態だった。
「ケント、だいじょうぶ」と、マダム・ストーンが声を掛けてくれたが、彼女の顔は笑っている。
「だいじょうぶ」と言いながらも、この酸欠状態は、ケントに、１９８５年、明の十三稜に行った時のことを思い出させた。
まるで小さな金魚鉢の中で、大きな金魚が、アプアプしているような心境だった。
そのような状況でも、マダム・ストーンは、この列車の旅を楽しんでいる。
ケントは、彼女の手配してくれたビジネスホテルもどきのようなところに泊まった。

ＭＨＫでも、数え切れないほど多くの薬局が営業している。
ケントは、火鍋（フォグオ）、串焼き、串揚げ、ローカル料理、道端で売っている焼きとうもろこしを食べ、竜泉寺に行ったりして、５日ほど溜溜（ぶらぶら）して過ごした。
帰りは、マダム・ストーンが、ＭＨＫのバスセンターまでケントを送ってくれた。
ケントは、午前９時２０分発の金色のリムジンバスで大連へ帰った。

４．

「もし、もし、ケントです」と、マダム・ストーンからの電話に出た。
「ニイ・ハオ」
「ケント、今、どちら」
「奈良の実家です」
「お母さんは、お元気」
「ありがとう、元気です」
「少し、困ったことが出来たの」
「どんなことですか」
「調査して欲しいの」
「たぶん、ＭＨＫの警察に依頼したら迷宮入りになってしまうわ」
「何を調査すればいいんだい」
「死因を調べて欲しいの」
「医者ではないけど、大丈夫かい」
「幼馴染のパンさんが突然死で、急性心不全と判断されたの」
＊著名人の死因を公表したくない場合や急死で最後まで死因が特定されない場合、そして、監察医制度の無い地方で起こった原因不明死は、ほとんど急性心不全で処理される。
「ケントには、医学的にではなく、どうして知人が死んだのかを調べて欲しいの」

「パンさんが死んだ原因を調べて欲しい、と言うことですか」
「そうです」
「電話では、詳しい話もできないわ」
「いつごろ、ＭＨＫに来ることができる、ケント」
「もう少し、母の話し相手になっていたいので、一週間以内では如何ですか、マダム・ストーン」
「じゃ、一週間以内ということで、お願いするわ」
「仕事は、マイペースでやってくれて結構よ、ケント」
「じゃ、ＭＨＫ見（ジエン・ＭＨＫで、お会いしましょう）」と言って、ケントは電話を切った。
ケントのように、話べたの人間には、ＭＨＫ見（ジエン・ＭＨＫで、お会いしましょう）という言葉は、便利だ。
とにかく、地名＋見（ジエン）で、「～で、お会いしましょう」という意味になるのだから。
ケントは、インターネットで、中国国際航空１５２便大連までの格安航空券を手配した。

5.

四日後の夕方、ケントは、大連和平広場という路面電車の駅前にある海鮮レストラン「大可以海鮮又一城」で、ＭＨＫ出身の薬剤師のスーサンと食事をしていた。
料理は、椒塩大蝦（大正えびのから揚げ）、水豆腐（豆腐のあんかけ）、東坡肉（豚バラ肉の煮込）とご飯、ビール２本を飲んだ。
スーサンは、ビールが好きなのだがアルコールに弱い。
色白のスーサンの顔が桜色になると、美形から色っぽい顔に変わる。
ケントは、彼女の顔を見ながら、ＭＨＫの薬局事情や薬のことを訊いた。
スーサンが、

「ケント、いつ、ＭＨＫへ行くの」と尋ねた。
「明日の朝のリムジンバスで行く予定だ」
「じゃ、ケント、一路平安（イールウピンアン）」
彼女も、ケントと一緒にＭＨＫへ行きたいようだったが連休が取れないのである。
食事が済んで、二人は、和平広場を溜溜（ぶらぶら）した。
和平広場（ハアピングウアンチャン）は、東洋一の面積を誇るショッピングアーケードだ。
二人は、和平広場のマクドナルドで、香草（バニラ）ミルクシェイクを飲んで少し閑談した。
スーサンとは、和平広場の路面電車の駅で別れた。
ケントは、タクシーで延安路の日月明賓館にもどった。
その夜は、ホテルの部屋で、荷物の整理をして、シャワーを浴びてベッドに入る。
翌朝、８時１５分に、ホテルをチェックアウトをして、タクシーで、大連駅裏のバスセンターへ行く。
日に焼けたバスの客引きが、ケントに声を掛けてくるが構わず、まっすぐ、金色のＭＨＫ行きのバスへ向かった。
大連・ＭＨＫと書いた金色のリムジンバスの前には、マダム・ストーンの知り合いで、中年の女性バス服務員がお客さんを待っていた。
ケントは、その女性服務員に荷物を預け、リムジンバスの切符を買う。
天気も快晴で、バス旅行には最適の日和だった。
リムジンバスは、大連を午前９時２０分に発車して、ＭＨＫの駅前に、午後５時５分に着いた。

6.

ＭＨＫの駅前で、マダム・ストーンが待っていてくれた。
「ケント、お疲れ、バス旅行はどうだった」
「バスの車窓から見る穀倉地帯もいいけど、少し疲れたよ」

ケントは、彼女が手配してくれた駅前のビジネスホテルにチェックインした。
マダム・ストーンは、ロビーで待っている。
３０１１号室に、ケントは、荷物を置いてから彼女の待つロビーにもどった。
「ケント、夕食は、何が食べたい」
「美味しい、串焼きが食べたい」
「じゃ、串焼きにしましょう」
「案内するは、ケント」
「その前に、春天商業街（チュンテイエン・シャンイエジイエ）を少し溜溜（ぶらぶら）したいのだが」
春天商業街（チュンテイエン・シャンイエジイエ）は、ＭＨＫで一番賑やかな通りだ。
二人は、宵の口の春天商業街をゆっくり歩き始める。
「いつも、どの薬局で薬を買うの」
この国の病院で処方してくれる薬は、市中の薬局で入手できる。
病院の薬は値段が高いので、市中の薬局で薬を買うのが一般的だ。
「そこに見える”ＭＨＫ人民薬店”で、いつも薬を買っているわ」
「私の父が病気をした時、他の薬局の薬は効果が無かったの。ＭＨＫ人民薬店で買った薬を飲んだら、父の病気が治ったのよ」と、マダム・ストーンが言った。
「それ以後、薬は、”ＭＨＫ人民薬店”で買うことにしているわ」
「この近辺だけでも、たくさんの薬局があるね」
「ＭＨＫも、薬局が増えすぎて、来年から、出店規制が始まるらしいわ」
「大連からの移動疲れが、出てきたようだ」
「お腹も減ってきたし、そろそろ、串焼きに連れて行ってくれるかな」
「この通りの裏に、”于記串店”という串焼き屋さんがあるわ」

7.

私たちは、2分ほど歩いた。
于記串店は、テーブルが12卓で、照明は少し薄暗い。
店の中は、いかにも串焼き屋だというような脂ぎった感じがした。
客は、私たちを含めて8人だった。
入り口の側のテーブルに、二人連れの男の客が座っている。
二人の男は、営業妨害で、警察を呼ばれてもおかしくないほど大きな声で話をしていた。
「ケント、何、召し上がる」と言って、マダム・ストーンが、メニューを見せてくれた。
「豚バラ、エノキの豚肉巻、玉蜀黍の炒め物、味付焼き鳥、牛ロース、雪花ビール1本」
「豆腐の薄皮焼き、エノキ茸、韮、青唐辛子、卵」を、二人で注文した。
ケントは、お腹が減っていた。
串焼きを食べ、ビールを飲みながら、彼女に色々尋ねる。
「パンさんは、病気だったの」
「そう」
「そして、彼女は、入院嫌いだったの」
「だから、パンさんの長女が、家で彼女を看病していたの」
「一週間に一度、彼女は、診察と検査のために病院へ通ってたわ」
「彼女の長女は、いつも、どの薬局で薬を買っていたんだ」
「さっき歩いた春天商業街(チュンティエン・シャンイエジイエ)の”MHK人民薬店”で、薬を買っていたわ」
「私が、彼女の長女に、”MHK人民薬店”で薬を買うように薦めたの」と、マダム・ストーンが言った。
「最近、彼女の病状は、好転していたのよ」
「だけど、彼女の長女が、マレイシアの親戚の結婚式に参加するために、ペナン島へ3週間ほど行っていた間に、彼女の容体が悪化して亡くなったの」
「彼女の長女が不在中、誰が、パンさんの看病をしていたんだ」

「長女が不在の間、夏休み中の大学生の次女が看病していたのよ」
「マダム・ストーン、パンさんの次女とは面識があったの」
「パンさんのお葬式で、初めて、彼女の次女に会ったの」と言って、マダム・ストーンは、悲しそうに残ったグラスのビールを飲み干した。

8.

「ストーリーが、見えてきました。マダム・ストーン」
「この件については、明日、報告することができると思います」と言って、ケントは、残りの串焼きを平らげた。
「完杯（ガンベイ）」と言って、ケントは、グラスのビールを開けた。
「明日のお昼は、火鍋（フォグオ）が、食べたいな」
「私も、火鍋（フォグオ）を食べたいと思っていたの」と、マダム・ストーンが、ケントに向かって言った。
「じゃ、明日のお昼は”氷河レストラン”で、火鍋（フォグオ）にしましょう」
「明日、”氷河レストラン”、１１時半で、いかが」
「明天、在氷河、見（明日、氷河でお会いしましょう）」
マダム・ストーンがタクシーに乗るのを見届けて、ケントはホテルまで歩いて帰った。
部屋に戻ると、ケントは、シャワーを浴びてからメールをチェックしてベッドに入った。
翌朝、ケントは、部屋の窓から射し込んでくる太陽の光で目が覚めた。
時計を見ると、午前3時４５分。
この時期の、ＭＨＫは、午前3時半ぐらいから明るくなる。
ケントは、少し早朝散歩をして、部屋にもどって来た。
「太陽は、当てにならない」と思いながら、ケントは、もう一度寝むることにした。
１０時２５分、ホテルの服務員が廊下を掃除するクリーナーの大きな音に、ケントは起こされた。

シャワーを浴びて、髭を剃ってからメールをチェックし、服を着替えて、ケントは、”氷河レストラン”に向かう。
１１時１８分に、ケントは”氷河レストラン”に着いた。
マダム・ストーンは、２階の個室で待っていた。
「昨夜は、よく眠れた、ケント」
「いや、太陽に騙（だま）されました」
「太陽が、どうしたの」
「ＭＨＫの今の時期、午前３時半ごろに陽が上る」
「窓の外は明るいので、起きなければいけないと錯覚しました」
「それじゃあ、お腹も減ったでしょう」
「今朝は、朝食抜きです」と、メニューを見ながら、ケントが言った。
「先ず、火鍋（フォグオ）のオーダーをしましょう」
マダム・ストーンは、ブザーを押して服務員を呼んだ。

9.

マダム・ストーンが、
「火鍋（フォグオ）のスープは、辛いスープと辛くないスープの２種類」
「野菜のミックス盛り、えのき茸、イカ団子、海老団子、海草、凍り豆腐、マロニー、長寿麺」
ケントは、
「豚肉、雪花ビール」をたのんだ。
スープが煮えるまで、二人でビールを飲み始める。
「火鍋（フォグオ）が煮えるまでに、貴女から依頼された友人のパンさんの件を報告します」
「私は、医者や薬剤師ではないので、直接、パンさんの病気や服用していた薬について触れません」と、ケントは、マダム・ストーンに向かって言った。
「ＭＨＫには、たくさんの薬局があります」
「同じ包装の薬でも、薬効成分に差がある」

「買う薬局によって、薬の効き目が違う」
「偽物の薬が、流通している」
「だから、マダム・ストーンは、いつも、”ＭＨＫ人民薬店”で薬を買っていらっしゃる」
「マダム・ストーンの友人のパンさんの長女も、”ＭＨＫ人民薬店”で薬を買っていた」
「パンさんの長女が、マレイシア・ペナン島の親戚の結婚式に出席するために、３週間、家を不在にした」
「マレイシア・ペナン島へパンさんの長女が出発した後、次女が、パンさんの看病をしていた」
「一番のポイントは、パンさんの次女が、どの薬局で、薬を買っていたのかが問題です」
「貴女は、パンさんの次女とは面識が無かった」
「”ＭＨＫ人民薬店”で薬を買いなさいと、マダム・ストーンは、パンさんの次女にアドバイスが出来なかった」
「パンさんの長女と次女は、近所でも評判になるくらい姉妹仲が悪い」
「二人とも、普段、ほとんど話もしなかったらしい」
「どうして、そんなことが分かったの、ケント」
「今朝、早朝散歩したときに、ロビーに居た人が話してくれました」
「マダム・ストーンの友人のパンさんは、ＭＨＫの名家の出だから、調べるのは難しく無かったのです」
「パンさんの長女は、どの薬局で薬を買うのか、次女に指示しなかった」
　ケントが、この国に来た当時、どの薬局で薬を買っても、同じ包装の薬ならば薬効は同じだと思っていた。
　しかし、薬剤師のスーサンと知り合ってから、ケントは、この国の薬（くすり）業界の実情を知る。
「たぶん、パンさんの次女は、”ＭＨＫ人民薬店”以外の店で、薬を買っていた」

「次女の買った薬を飲んだパンさんの容体は、悪化した」
「そして、マダム・ストーンは、パンさんのお葬式で、その次女と初めて会った」
「パンさんの長女が、ペナン島から帰ってきて、次女と大喧嘩をしている」
「長女は、ペナン島へ出発する前に、パンさんが服用していた薬の名前と製薬会社名を書いた紙を次女に渡していた」
「長女は、次女がパンさんに薬を飲ませなかったと勘違い」
「次女は、長女に残っていた薬を見せた。その薬は、長女が買っていた薬と同じ包装で、薬の説明書も同じだった」
「しかし、長女と次女が薬局で買って、パンさんに飲ませていた薬の期待効果に差が生じた」
「そして、快方に向っていたパンさんの容体が悪化した」
「マダム・ストーンが、パンさんの次女と会って、薬をどこの薬局で買ったのか、確認すれば、全てが事実となるでしょう」
「パンさんの死は、この国の薬品流通市場の不祥事が原因で起きた不幸な出来事だったのです」
「報告は以上です。マダム・ストーン」
「友人のパンさんのために、犯人を明らかにしますか、マダム・ストーン」
黙って、マダム・ストーンは、グラスのビールを飲み干した。
「犯人を明らかにすると、警察が動くかもしれないわ」
「この国で、警察が動き出すと厄介なの」
「だから一生、”ＭＨＫ人民薬店”以外の店で、薬を買わないわ、ケント」と、マダム・ストーンは、悲しそうに言った。

了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5663y/

メデイシン　期待効果と松浦ケント

2011年11月17日03時29分発行